タイムマシーンに乗って

なぉ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タイムマシーンに乗って

【Ｎコード】
Ｎ４０５５Ｄ

【作者名】
なぉ

【あらすじ】
たった一つだけ、願いが叶うなら、俺は、楽しかった、あの時間を取り戻したい。

過去からの贈り物～始まり～（前書き）

初めて書いた小説です。いたらない事ばかりだと思いますが、大目に見てやって下さい。

過去からの贈り物～始まり～

『過去は変えられない』

そんなこと分かってる。
けど、もし、この世にタイムマシーンがあったなら、一つだけ…たった一つだけ、変えたい過去がある。
そう思う事は、イケナイ事なのだろうか？
まぁ、そんな事を考えても、タイムマシーンなんてあるわけないんだけど…
それでも、あったなら…
私は、あの時、救えなかった父を救いたい。

『透…父ちゃんの事、嫌いなんだろ？』

『ごめんな、憐れな父ちゃんで…』

違う！違うんだ！！
そんなこと思ってない！！
なんで声が出ない？！なんで体が動かない？！

違うのに！俺は―

『ジリリッ！！』

俺の言葉を遮るように、目覚ましが鳴り響く。

また、今年も夢を見た。父が悲しい眼で俺に謝り続ける…

父の命日になると、必ず見る。ソレに捕われるかのように。

8月1日、父が死んで十年がたった。

確実に、時間は過ぎて逝くのに、俺の時間は、死んだようにそこで止まってる。

そう、十年前のまま。

毎年、家族そろって墓参りに行くのだが、今年は、先に俺一人で墓掃除を始めていた。

墓掃除を終えて、一息ついていたら、急に耳元で誰かが呼んでいる気がした。

『なんだ？今の声？』

『…る…透…』

『あっちの方からするな？』

俺は、声のする方に歩いていった。

『こんな森あったか？』

目の前には、大きな森。
十年間ここに来ているけど、こんな所があったなんて知らなかった。

『透…』

俺は、森に入った。
ほんとに小さな森で、例えるなら、子供の頃に遊んだ秘密基地みたいな森だった。

ふと、目の前に古びた機械が見えた。

いつの間にか、声は止んでいた。

『なんだ？この機械？』

『これは、タイムマシーンです。
忘れられない過去を、変えて見ませんか？』

馬鹿げてる…誰もがそう思うだろうけど、その時の俺は、気がついたら、ソレに座っていた。

『ありえねぇよな…何やってんだろ。』

降りようとした瞬間、機械が動きだし、瞬く間に光に包まれた。

『うわぁ～！！』

その後の事は、覚えていない。

気がついたら俺は、自分の家の前に立っていた。

『なんで、俺ん家？』

俺は、訳がわからないまま家のドアを開けた。

『お～い？母ちゃん？姉ちゃん？』

呼んでみても返事はない。

当たり前か、今日は父の命日。

今ごろ、二人は墓参りに行っているはずだから。

取りあえず、中に入ろうと思い、靴を脱ごうと下を向いた時、ふと俺の目に小さな子供の靴が見えた。

『誰の靴だ？』

こんな子供の靴なんて知らない。うちには、小さい子なんていないし、

姉も結婚はしているが、子供はいない。

おかしいと思いながら居間まで行ってみたが、やはり誰もいない。

ガキの頃の靴でも整理していたのかと考えていたら、信じられない光景が目に飛び込んで来た！

『雪…』

そこには、昔飼っていた猫の雪がいた。

『嘘だろ…？だって、雪は…』

そう、雪はとっくの昔に死んでいた。
こんなところに居るはずがない。

俺は、何かがおかしいと暦を見てみた。

『１９９０年８月１日』

どうやら俺は、本当に過去に来てしまったみたいだ。

普通、そんな体験をしたら、慌てるはずなのに、今の俺は、不安や戸惑いよりも、期待や嬉しさでいっぱいだった。

”これで、過去が変えられる”と…。

チチヲスクエルハズダト

ここで、一つ説明しておかなければならないことがある。

それは、俺が『なぜ、タイムマシーンに乗ってまで、過去を変えたいか？』という事である。

その理由は、今から話す少しだけ長い物語の中に…。

俺の家は、普通の家庭と少し違っていた。

母と父は、籍を入れず暮らして居た。俗に言う内縁関係だった。

父から認知を受けなかった、俺と姉は、私生児として、母の姓を名乗った。

別に、悔しいとか悲しいとか、そんな気持ちはなかった。

当時から、多額の借金を抱えていた父が、母や俺たちに迷惑がかからないように、そうしたのだと俺は思っていたからだ。

父は、本当にろくでもない男だった。

定職には就かない、パチンコ・競馬は当たり前の男で、そのための借金なんて日常茶飯事だった。

でも、酒は嫌いらしく、飲んでいる姿は、一度も見たことがなかった。

俺が、母なら絶対に父のような男とは、一緒にならないと思った。

しかし、そんな父にも一つだけ、人して誇れるところがあった。

それは、けっして俺たち家族に、手をあげないこと。

昔、俺が遊んでいてうっかり近所の窓ガラスを割ってしまった時も、大目玉をくらったが、殴られる事は、なかった。

後から、父に『なぜ、殴らないのか？』と尋ねてみた。

父は、『この手は、お前を殴るための手じゃない。こうやって、肩車してやるための手だ。』と笑って私を肩車してくれた。

『でもな、父ちゃんは、お前が、世間に顔向け出来ないような男になりそうな時は、迷わずお前を殴るからな。』

始めて見た父の真剣な姿だった。

父の父、つまり俺の祖父は、すごく厳しい人だったらしい。

父には、兄が一人いて、その兄は、頭がよく常に成績は一番だったそうだ。

その反対と言っちゃなんだが、父は、全くと言っていいほど、勉強が出来なかった。

『とにかく一番になれ』

その言葉が、祖父の口癖で、その言葉を聞いた父は、何を勘違いしたのか、『じゃあ、俺は一番強いガキ大将になる』と宣言したらしい。

でも、祖父は、笑わずに、ただ『そうか。頑張れ』と言ったそうだ。

『ただいま！』

その声に、俺は現実に引き戻された。

まずい！誰かが帰って来た！！

このままでは、見つかってしまう？！

『母ちゃん？まだ帰って来てないの？？』

声の主が近付く前に、とっさに押し入れに身を隠した。

『ただいま、雪。』

その声の主は、１１年前の俺だった。

『今日のおやつは何かな？』

どうやら、”俺”は、台所でおやつをさがしているみたいだ。

（ん？待てよ。

確か、俺は玄関に靴を脱いだままにしているはず。

なのに、”俺”は、気にも止めていない…もしかして、俺の姿は見えないのか？）

確証はなかったが、なんとなく大丈夫な気がしたので、そっと押し入れから出てみた。

台所で、おやつを物色している”俺”に近付いて『透…！』名前を呼んでみた。

『あれ？おやつどこ？』

返事はない。
やはり、聞こえないらしい。

（俺、こんなに小さかったんだな。）

そっと、頭を撫でても反応がない。

ちょっとだけ、寂しかった。

夢からのメッセージ～真実～

これから、どうしようか…

俺が、本当に来たかったのは、１１年前じゃなくて、１０年前だ。

なぜ？１１年前の８月１日なのだろうか？

何か意味があるのだろうか？

そういえば、ちょうどこの時期に、父と俺で父方の祭りに出かけた思い出がある。

行くまでは、父も笑顔だったのに、帰って来た時には、笑顔はなくどこか寂しそうに俺を見つめていた。

そう、夢の中の父と同じように…

あの時、何があったのだろう？

思い出そうと、頭の中で精一杯考えるが、思い出せない。

あの夢を繰り返し見る原因は、きっとここにあるのだろう。

だとしたら、１０年前ではなく、１１年前に来た意味が繋がる。

”真実を知りたい”

強く願った時、俺は、また光に包まれていた。

（ここは…！）

目の前には、華やかな浴衣姿の人々や、数々の露店。
賑わう祭りの光景が広がっていた。

懐かしい…一度しか訪れた事がないが、確かに覚えている。

この祭りが、父と来た最初で最後の祭りだから。

『透！走ったら危ないぞ？』

あぁ…

『金魚掬いがあるぞ？父ちゃんと勝負するか？』

言葉にならない…

『お前、下手くそだな？貸してみろ！こうやって掬うんだよ！！』

一番逢いたかった人が、今、目の前にいる。

気がついたら、涙が頬を濡らしていた。

しかし、俺には感傷に浸っている時間はなかった。

この時の父は、まだ笑顔で祭りを楽しんでいた。

（この後か…）

一体、この後なにがあったのだろう？

ふと、”俺”がおもちゃを置いてある露店で立ち止まった。

何かを眺めている。

『透？どうした？なんか欲しいのか？』

『ううん。』

『遠慮すんなよ、俺が買ってやる。』

『いいよ…』

会話を割って入るかのように、おもちゃ屋の主人が『お前、俊か？』

『あぁ？そうだけど…』

『やっぱりな、幹雄にそっくりだな？ほら、覚えてねぇか？昔、お前の真向かいに住んでた！』

『あぁ！牛飼いのジジィかぁ！！』

『ジジィは余計だ！…本当に、相変わらずだなぁ、お前は。そのガキお前のか？』

『おぉ！透っていうんだよ。透、ジジィに挨拶しろ！』

『こんばんわ…』

『こんばんわ。坊主、年は、いくつだ？』

『１１です。』

『そうか…１１かぁ。』

『ガキがいるって事は、お前もちゃんと家庭もってしっかりやってるのか？』

『しっかりではないけどな。』

『まだ、遊んでんのか？』

『まぁな。ギャンブルは止められねぇよ。』

『馬鹿野郎が！そろそろ真面目になれ！！幹雄だって天国で浮ばれねぇよ』

『うっせぇ！ジジィ！！親父なんか知ったこっちゃねぇよ。』

『はぁ…。そうかよ。もう何も言わねぇ。…で、坊主何が欲しい？』

『帰るぞ、透！こんな店で買えるか！？』

『あ、父ちゃん！待って！！』

『坊主、お前は、親父のようになるなよ？』

そうだ！この後！！

『透！何やってんだ？早く来い！！』

『うるさい！！何にも知らないくせに父ちゃんを悪く言うな！！』

俺は、腹が立っておもちゃ屋の親父に大声で怒鳴ったんだ。

『透…』

『父ちゃんに謝れ！！』

『透、もういいから。』

『嫌だ！お前！父ちゃんに謝れ！！』

『…悪かったな。他人が言い過ぎた。許してくれ、坊主。』

『うっ…ヒック…』

『透？父ちゃんもう怒ってないから、ジジィを許してやってくれ？』

『…うんっ…』

『ありがとう、親父想いのいい子だな？坊主は。』

『あぁ…本当に…』

あの顔だ！！
今にも、泣きそうで苦しそうな顔…
この時だったんだ。

帰った後も、ずっと苦しそうで、でも次の日には何事もないような顔をした父がいた。

俺が、あの時あんな事言わなければ、父があんな顔をしなくて済んだのに…

（ごめんな…父ちゃん。けど、許せなかったんだ。いくら、ろくでもない父ちゃんでも、俺にとっては、たった一人の親父だったから。）

ごめん…

また、体が光だし、次に飛ばされたのは、小学校最後の年で、桜並木が春を彩っていた。

父との約束～そして～

俺の家の近くに、大きな桜の木がある。

春には、満開の綺麗な桜を咲かせた。

本当に綺麗だった。

俺は、いつも遠くからその桜の木を眺めていた。

『透…』

『うん？』

『花見に行くか？』

父のその一言で、俺は初めて、近くからその桜を見る事が出来た。

『着いたぞ！！』

『父ちゃん…ここって、お墓の…』

『なんだ？怖いのか？男の癖に？』

『こ、怖くねぇよ！！』

そう言って俺は、小刻みに震えながら、父の手をギュッと握った。

『……。』

父はそっと髪を撫でてくれた。

それが妙に落ち着いて、気がつけば父と一緒に桜を眺めていた。

『綺麗だね！』

『あぁ…本当に。』

『どうかした？』

『透…』

『なに？』

『父ちゃんが死んだら、ここに墓建ててくれな。』

『…うん？』

『約束！』

なぜ、父はそんなことを言ったのだろう？と思ったが、どうせ、いつもの冗談だろうと思い特に気に留めなかった。

本当に冗談だったらよかったのに。

『透に見せたいものがあるんだ！』

父が唐突に言った。

『見せたいもの？』

『そう！ちょっとついて来てくれるか？』

『うん！』

桜の木の奥に狭い道が見えた。
その道を奥へと進んでいった。

『ここだよ。』

『わぁ！すごい！！』
そこには、森が広がっていた。

そう、誰かの声に呼ばれて、タイムマシーンを見つけた、あの森だった。

（そうか…この森だったのか…）

すっかり忘れていた。あの時の森だということを。なんせ、ここに来たのは、後にも先にも一回だけだったからだ。

『どうだ？すっげぇだろ？』

『うん、すごいね！！どうやって見つけたの？』

『たまたま、近くを散歩してたらな。
これは、透に見せなきゃなって！』

『俺に？姉ちゃんは？』

『内緒。このことは、母ちゃんにも姉ちゃんにも内緒だから言うなよ。』

『なんで？』

『なんでも。それから、今日のこと全部内緒な！』

『えぇ～！！』

『これは、男と男の約束だ。わかったな？』

『…うん、わかった。』

『よし、偉いぞ！』

それから”俺”たちは、しばらく遊んでその場を後にした。

あの日から、数か月が経った。

もう、季節はすっかり夏で、セミが喧しく鳴いていた。

空は、青く澄んで、雲なんて一つも見当たらなかった。

『平和だな～』なんて、窓から空を眺めていた。
明日も明後日も、こんな日が続くんだろうな…。そう信じていた。

なのに…

なんで？

なんで、あなたは…

その日の日付は、”１９９１年８月１日”。

父が、自ら命を絶った日だった。

皮肉な現実～父の死～

”１９９１年８月１日”

一生、忘れない日。

この日の、風景も匂いも想いも、…

あ、そういえば、初めて母の涙を見たのもこの日だったっけ。

朝、起きたら父の姿がなかった。

珍しいのもあるもんだな？まだ、パチンコ屋の開店には早くないか？

俺は、母に聞いてみた。

『母ちゃん？』

『ん～？』

『父ちゃんは？』

『朝早くに出かけたよ？なんか、じいちゃん家に用事があるからって。』

『ふ～ん…』

『そんなことより、早く顔洗っておいで！ご飯だよ。』

『は～い。』

じいちゃん家になんの用かな？

その時の俺は、何も思わなかった。

だけど、親父は…俺達を思ってくれてたのかな？

朝ご飯を食べ終えて、特にすることもないので、空を眺めていた。

見上げた空は青く澄み渡り、雲一つなかった。

蝉の音がうるさくて、隣りのおばちゃんと母の笑い声、どこからか流れてくる優しい匂い。

今、自分は一番幸せな奴だななんて、大袈裟に思ったりして…

そんな”俺の想いを遮るかのように、電話が鳴った。

母達の笑い声が聞こえなくなっていた。

『透ちゃん、おばちゃん家に行こうか？』

さっきまで、母と話をしていたおばさんが、俺に言った。

『母ちゃんは？』

『お母さん、さっき電話かかって来て、ちょっと外にね…』

『用事って？』

『うん、ちょっとね…』

煮え切らないおばさんの態度に俺は、不安を感じた。

『心配しなくても夕方には戻るって言ってたから、おばちゃん家で一緒に待ってよう。おばちゃん、ケーキ焼いてあげるから。』

『うん…』

『それじゃあ、行こうか。』

後から、友達の家に遊びに行っていた姉も、おばさんの家にやってきた。

三人で、ケーキを食べて話をしながら、母の帰りを待ち望んでいた。

４時になっても、５時になっても母は、帰って来ない。

不安になる俺を、姉やおばさんは、大丈夫だと励ましてくれた。

結局、母が帰ってきたのは、時計の針が、８時を回ってからだった。

『透ちゃん、お母さん戻って来たからお家に行こうか？』

待ちくたびれて、いつの間にか眠っていた俺は、その声に俺は起された。

『姉ちゃんは？』

『お姉ちゃんは、先に戻ったよ。』

おばさんの目には、涙の跡があった。

『なんで、おばちゃん泣いてるの？』

俺が聞くと、

『…ううん、なんでもないよ。』と俺を抱き締めた。

玄関を開けると、無数の靴が並べられていた。

こんな時間にお客さんかな？と不思議に思っていたら、奥から疲れきった顔をした母が出て来た。

『ごめんね…早紀ちゃん。こんな時間まで、透を預かってもらって』

『何言ってるの！あたしと洋子ちゃんの仲じゃない。』

『…ありがとう。』

『母ちゃん？』

『…ん？』

『父ちゃんは？』

俺の問いに、母は少し黙ってから、『お父さん居間で寝てるから行っておいで』と教えてくれた。

『はぁい～』

あの時の、嬉しそうな俺の声を聞いた時、胸が張り裂けそうだったと母が後になって教えてくれた。

『父ちゃん、起きろ！』

俺は、居間のドアを思いっきり開けた。

そこには、布団に寝ている父と、その姿を見て泣いている姉、そして、父の兄夫婦や親戚が周りを囲んでいた。

その光景に俺は一瞬戸惑った。しかし、すぐに泣いている姉に歩み寄り訳を聞いた。

けれども、姉は何も答えず泣くばかりだった。

そして、姉が泣いているにもかかわらず、今だに寝ている父に向かって、『起きろよ！』と叫んでいた。

その声に親戚中の誰もが、俯いた。

俺は、父に違和感を覚えた。

今でこそ、そんな光景を見たらすぐに分かるが、本当にその時は、ただ眠っているのだとしか思わなかった。

とにかく起そうと、父に触ってみた。とても冷たかった。

そこで初めて、父は死んだのだと気付いた。

頭がパニックになった。

なぜ？父が？！

これは、夢だ！

それとも、何かの冗談で皆が俺を騙そうとしているんだろ？

なぁ？

姉を問いつめた！！

けれども、そんな筈もなく返ってきた答えは、やはり父の死という現実だった。

堰を切ったように、涙が止まらなかった。

思い出していた。父が死んだ時の事を…

苦しくて悲しくて、気がつけば、俺の時間はあの時から止まっていた。

でも、そんな思いも今日で終わる。

今の俺には、タイムマシーンがある！

これで、やっと父を救えるんだ。

過去を変えて、皆でまた仲良く暮らすんだ。

俺は、最後に強く願った。

”父を助けたい”…と。

体が光りに包まれて、いろんな光景が流れてきた。

もう、時間が無いのだろう…なんとなくだけどそう思った。

だから絶対に父を助ける！

そう、考えてるうちに、光りが弾け飛んだ。

そして、俺は、ゆっくり目を開けた。

過去との決別～そして、未来へ～

まだ、夜が明けていないのか、薄暗い部屋の中に、俺は立っていた。

（ここは、俺の部屋？）

―ガチャ―

ドアが開く音がした。

俺が、振り返ると、そこには、父が立っていた。

時刻は、午前５時４３分。

その時、父はまだ生きていた。

俺の部屋に何の用だろうか？

まだ、眠っている”俺”の隣りに座る父を見つめた。

そして、父は独り語り始めた。

『ホント言うとな、父ちゃん、最初はお前達の事、邪魔で仕方なかったんだ…。

だって、まだ自分がガキなのに、ガキを育てるなんて自信がなかった…

だから、母ちゃんからお前達が出来たと聞いたと時は、『降ろせ』と言うつもりだった。』

ショックだった。今まで父に認知されなくても、悔しいとか悲しいとか思わなかったが、この時、初めて父を憎いと思った。

『もちろん、母ちゃんとも別れるつもりだった…けど、借金だらけで行く当てもなかったから…子供も自分が育てるって言うから、一緒にいたんだよ。』

父は、目を閉じて何かを思い出していた。

俺は、父の話を黙って聞いていた。

『けどな…なんでだろうな…お前達が、いつの間にか、一番大切なモノになってた。』

父は、泣いていた。

『ごめんな…透…』

寝ている”俺”の頭を大きな手で、撫でていた父が、窓に立っている俺を真っ直ぐ見つめて、

『透…父ちゃんの事嫌いになったろ?』

『ごめんな…馬鹿な父ちゃんで…』

父は、言った。

『なんで…?俺が…』

『なんでかな?お前が、見えるよ。大きくなったな…透。』

『父ちゃん！！』

俺は、父にしがみついて泣いた。
父は、笑って俺を抱き締めてくれた。

『こんな大きくなって…立派になって…』

『母ちゃんは、元気か？姉ちゃんも幸せに暮らしてるか？』

俺は、泣いていて何も言えずに、ただ必死で頷くだけだった。

『そっか…』

父は、心底嬉しそうに笑った。

―これから、死ぬって言うのに、なんで笑うんだよ？―

―なんで置いて行くんだよ？―

―一番大切なら、一緒にいてくれよ？―

俺は、思いのたけを、父に全てぶつけた。

『一緒にいたいよ…俺だって、お前達とずっと一緒に暮らしたい。
…けどな、出来ないんだよ。』

『借金なら、頑張って返して行きゃいいじゃねぇかよ？なんで死ぬ

んだよ？逃げんだよ？』

『透…ごめんな。父ちゃん馬鹿で。ホントに馬鹿で…』

父は、ただ謝ってばかりだった。

俺は、『未来から父を救うために来た。』と告げた。

父は、『そうか…』とただ一言だけ呟いた。

長い沈黙が続いた。

父は、何かを決意したかのような表情で、一言俺に告げた。

『帰れ。』

そう、俺に告げた。

『は？…何言ってんだよ？俺は、父ちゃんを―』

『何度も言わせるな！必要ない。帰れ。』

『何でだよ？訳わかんねぇよ？』

『今、俺が居なくてお前達は、幸せなんだろ？なら、それでいいじゃねぇか？無理に俺を救わなくたって。それにこっちは、有り難迷惑だ。やっと、死ねるってのに恩着せがましく来んじゃねぇよ！！』

『何でだよ？それ？父ちゃんが居なくて幸せ？馬鹿野郎！！あんたが居なくて一番辛いの誰だと思ってる？一番悲しいの誰だと思ってる？俺たち家族だよ！！』

『あんたが居なくて幸せなんて言うんじゃねぇ！！』

『透…』

『俺の時間は、ここでずっと止まってるんだよ…？あんたが死んじまうから…ずっと止まってるんだよ！！』

『透っ！！』

親父は、俺を抱き締めたまま泣き崩れた。

そして、本当の理由を話し始めた。

『癌なんだよ…父ちゃん。』

『えっ…？』

『もう、あと少しの命しかないんだよ…』

知らなかった。そんな事…だって、母は、一言も言わなかったから…

『母ちゃんには、黙ってろって言ったんだ。』

俺の気持ちを見透かしてか、父は喋り始めた。

『今まで、俺は自由気ままにやってきた。十分遊んだし、お前達と出会えて十分過ぎる程の幸せをもらった。俺は、世界で一番の幸せ者なんだよ。だから、これは、ケジメなんだよ？』

『そんなのおかしい！なんで、死ぬ事がケジメなんだよ？』

『分かってくれよ？透…。』

『分かんねぇよ…！』

『父ちゃんは、このままほっとけば、死ぬ。けどな？母ちゃんがそうさせると思うか？あんな優しい母ちゃんの事だから、父ちゃんに世話焼いて、入院だの、薬だので、いらねぇ金を遣わしちまうだろ？今まで、散々苦労して来たのに…もう、そんなことさせたくねぇんだよ？』

『けど…！！』

『理屈じゃないんだよ…この気持ちは。』

『いつか、もしお前にも家族が出来たらきっと分かる。』

それ以上何も言えなかった。

『透…もう、さよならだ。』

その時、俺の身体が光出した。

『もう、お前にも俺にも時間がないみたいだ。』

『嫌だよっ！逝くなよ！！』

なんで、こんな時に…まだ、何も出来てないじゃないか！！

『透、ありがとう。』

ありがとうなんて言うなよ…

『俺の子供になってくれて…俺を父だと思ってくれてありがとう。』

『…馬鹿野郎…』

俺の最後に呟いた言葉に、父は、笑って泣いていた。

そして、俺は光に包まれて消えた。

あの出来ごとから、半年が過ぎた。

あの後、気づいたら、墓で倒れていた。

すぐに、あの森に行ってみたが、当然、何もある訳なくて、結局夢を見ていたのかもしれない。

しばらくして、母と姉がやってきたので、父の死の本当の理由について聞いてみた。

母はびっくりして、なぜ知っているのかと聞いてきたので、適当に

誤魔化した。

”タイムマシーンに乗って聞いて来ました。”なんて言える筈ないから。

母は、父の墓の前で全てを話してくれた。

姉は泣いていた。

母も俺も…。

その時、突然雨が降り、空を見上げて母が言った。

父も泣いている…と。

俺と姉は、そっと空を見上げた。

そして、今、俺は父が言っていた『理屈じゃないモノ』と言うやつがどんなものか考え始めていた。

来年、長い間付き合ってきた彼女と結婚する事が決まったからだ。

これから先、何があるか分からないが、この人とだったら乗り越えられると思える人に出会えた事を感謝している。

あのタイムマシーンは、確かに過去を変えた。

父を救いに行くのではなく、俺の止まった時間を動かすための、タイムマシーンだったのだろう。

タイムマシーンに乗って見て来た過去は、同時に俺を未来へと運ん

でくれるものだったのだ。

最後に、俺が女だったら、絶対に父みたいな人とは結婚しない。

けど…生まれ変わっても、また、父と母の元に生まれたいと思う。

過去との決別～そして、未来へ～（後書き）

ここまで、読んでくれてありがとうございます☆

もし、よかったら感想を聞かせて下さい☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4055d/

タイムマシーンに乗って

2010年10月28日08時20分発行